

氏名	竹 井 義 隆		
学位(専攻分野)	博 士(医 学)		
学位授与番号	博 乙 第 2589 号		
学位授与の日付	平成 5 年 6 月 30 日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 4 条第 2 項該当)		
学位論文題目	多発性軟骨性外骨腫の追跡調査		
論文審査委員	教授 折田 薫三	教授 平木 祥夫	教授 赤木 忠厚

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

多発性軟骨性外骨腫29例の臨床像とX線像について追跡調査し、特に下肢の関節変形の頻度と症状、およびその経過と治療について検討した。29例中25例になんらかの関節変形を認め、上肢では39%に前腕の変形を認めた。下肢では約50%に外反股を、約35%に臼蓋形成不全を認め、2例4股が二次性変形性股関節症に進展していた。外反膝は約39%に認め、その主因は約1/3が大腿骨遠位部の外反により、残りの約2/3が胫骨の外反によるものであった。足関節の外反は約67%に認めた。臨床症状としては、下肢変形にともなう関節の疼痛と機能障害を約半数の症例に認めた。X線像で下肢の関節変形は4才頃より出現し、外反股、臼蓋形成不全、外反膝は12才頃まではその程度が変動するが、それ以降は変形の増悪は少なかった。足関節の外反変形は成長とともに増悪する例が多かった。高度の関節変形に対しては、骨切り術等の矯正術が必要と思われるが、成長期に行なう場合再発を十分考慮にいれる必要がある。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

多発性軟骨性外骨腫(MOE)は稀れた疾患で、長期followの報告は殆どみられない。本研究者は同教室における最近37年間のMOE 96例中29例につき下肢関節の変形を中心に平均9.6年のfollowを臨床的、X線学的に行い興味ある知見をえている。29例中25例に関節変形があり、上肢35%、下肢50%、臼蓋不全35%、外反肢39%、足関節外反67%であり、足関節外反のみ12才以降も増悪することを知り、成長期の手術適応の重要性を強調している。臨床上重要な知見で、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。